関西大学本館について

橋寺知子

はじめに

1927（昭和2）年に千里山の地に竣工した関西大学本館は、大阪市内にあった住友合資会社の社屋を譲り受けたものであり、『関西大学百年史』においても言及されている。2022年の大学昇格100年を前に、年史編纂室から住友史料館に社屋の寄付に関する資料の照会を行ったところ、住友総本店に保管されていた書面があると回答があった。ここにその資料を紹介するとともに、図面や写真資料を参考にし、改めて関西大学本館の建築の概要を記しておきたい。

大学本館の建設

1922（大正11）年6月、千里山移転時に存在した学舎は予科校舎1棟のみであった。学校運営の中枢となる大学本館は、移転当初から計画され、資材購入も進められていたが、1923（大正12）年9月、不慮の火災で材木の大半を焼失し、本館の建設は頓挫した。[1] 徐々に学生数も増え、新校舎の建設が求められる事態となり、多くの本学関係者の努力により、住友合資会社の社屋を譲り受け、新校舎を建設することが決まった。

『関西大学百年史』では、「建物の寄贈にあたっては、山岡総理事の並々ならぬ斡旋のあったことはいうまでもないが、住友の顧問弁護士だった新理事喜多村桂一郎の尽力も少なくなかった」[2] とある。また『北浜五丁目十三番地まで　日建設計の系譜』では、「関西大学の命名者であり、同大学の前身関西法律学校時代からその

図1　大学本館（昭和2年完成）

発展に尽力して大阪地方裁判所長に兼ねて同大学学長となり、このころ理事となっていた河村善益は、住友総本店総理事鈴木馬左也とは法科大学以来の親交があった。また、住友合資会社常務理事小倉正恒の岳父であった縁故により、住友本店の旧建物が望まれ、これを寄付したのであった」[3]と述べられている。1927（昭和2）年6月5日に、昇格5周年記念式典と合わせて挙行された本館竣成式に、小倉正恒は寄贈者を代表して参列し、祝辞を述べている。

住友総本店仮建物について

大阪を代表する商家である住友家は、明治期にはさまざまな新しい事業に着手し、それに応じて本店も幾たびか移転した。日露戦争後、拡大した会社の規模に応じた本店を建設するため、土地を探し求め、現在の大阪市中央区北浜4丁目6の一街区の土地を取得した。現在、敷地の西側は阪神高速道路の高架道路だが、当時は西横堀川が流れていた。取得した土地の南側半分に社屋新築工事が進められ、1908（明治41）年11月に竣工した（図5）。「建坪六四〇坪の木造二階建洋館で、南西隅の部分は八角形塔状として、ドームを持つ三階をつけた。およそ一階を銀行、二階を本店に当て、二階の西側には家長室、総理事室、理事室が並んでいた。この建物は、いずれ本格的な建物を建てるまでの仮本店であったがルネサンス風の見事なものであった」[4]と、『北浜五丁目十三番地まで　日建設計の系譜』では表現されている。この「本格的な建物」が、住友ビルディング（現・三井住友銀行大阪本店ビル）で、1926（大正15）年4月に北側半分が1期工事として竣工した。続いて1927（昭和2）年9月に南側の2期工事が着工されることになり、仮本店は取り壊されることになった。1924（大正13）年発行の『大阪パノラマ地図』には、広い空き地の住友本店建設予定地の南西部に仮本店が建っている様子が描かれている。

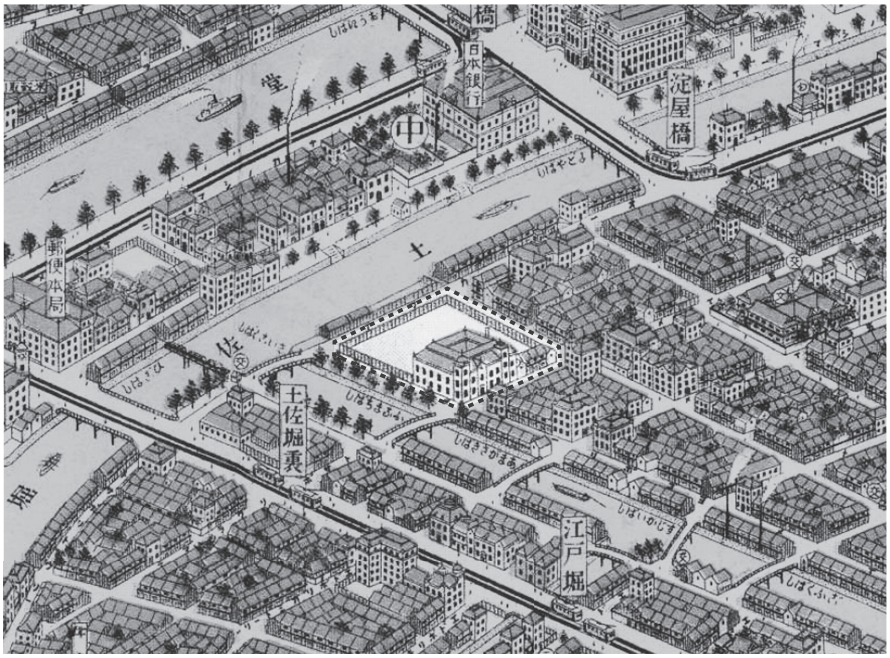

図2　住友ビルディング建設予定地（大阪パノラマ地図　1924年発行）

住友合資会社からの建物の寄贈の経緯

住友史料館の調査により、住友本店に寄付に関わり稟議された際の起案書が残されていることがわかった。「関西大学ニ本社建物寄附ノ件」（大正15年4月19日決裁）と「関西大学ニ旧本館建物寄附申込書差出ノ件」（大正15年6月1日決裁）の2点である。

前者は、同年4月15日に山岡順太郎が来社し、本社建物を寄付してほしいとの依頼があったことをまず述べ、寄付物件の詳細や条件を明らかにするものである。後者は、住友合資会社から関西大学への「寄附申込書」の案で、参考資料として、関西大学からの「寄附御受書」も添付されている。この2点の書類に記述された内容は、多少表現に差異はあるが、寄付物件の点数や建築面積等に相違はない。寄附申込書案によると、次の通りである。

一、寄附物件
一、大阪市東区北浜五丁目二十二番地上木造立瓦張スレート葺二階建（一部三階建）洋館一棟、此建坪参百七拾五坪二合六勺四
一、木造亜鉛引鉄板葺二階建洋館一棟、此建坪参拾四坪壱合壱勺弐
一、煉瓦造スレート葺二階建倉庫一棟、此建坪弐拾参坪九合八勺
一、煉瓦造瓦葺平屋建暖房用汽罐室一棟、此建坪八坪九合壱勺
一、鉄製煙突一基
一、ロコモティーブ型汽罐一基

「関西大学ニ本社建物寄附ノ件」には、「備考」に次のような記述がある。

一、寄附後ハ大学ニ於テ是ヲ教室及大学本部トシテ使用スル趣ニ付不要建物ノ処分トシテハ当ヲ得タルモノト云ふへく加之同大学ニ対シテハ従来左ノ通リ尽力セラレ候関係モ有之本寄付ノ価値甚ダ大ナルモノト被存候
同大学ニ対シテハ大正十一年拡張後援会ニ金参千円也、同年講堂建築費トシテ金壱万円也寄附相成尚小倉理事ハ其評議員御受託相成居候

住友合資会社は、本館建物の寄付だけでなく、それに先立ち、折にふれ関西大学を経済的にも人的にも支援していたことがうかがえる。[5] 寄付する建物は、本格的な本店の建物が建つまでの仮建物ではあったが、設計は住友家が大阪府に寄付した大阪図書館（現・大阪府立中之島図書館）の設計も手がけた住友本店臨時建築部の野口孫市であり、本格的な洋風建築であった。1927（昭和2）年、住友ビルディングの2期工事の着工が決まり、「そこで旧建物、つまり従来の仮本店の建物をとり壊すことになったが、八角形の塔屋を頂いた風格のあるこの木造建築は取り壊すのを惜しまれていた」[6]と言う。書類では「不要建物」と記されているものの、愛着がある建物であり、大学において

学舎として再利用されることは、住友にとっても適切な処分方法と判断されていることがうかがえる。

備考にはもう一点、関西大学と関連する事項が記されている。

一、曩ニ別紙切抜ノ如キ新聞記事現ハレタルニ対シ過日大学側ヨリ教授来社シ小倉理事、大屋部長迄陳謝スル所アリタリ

別紙切抜の新聞記事とは、1926（大正15）年4月7日の大阪毎日新聞に掲載された「住友家寄贈の建物を千里山に移築　面目全く一変する昇格後の関大」と題された記事である。この記事では、観覧席を有する1万坪のスタジアムが工事中であること、隣接して3階建のクラブハウスが建設される計画があること、そして住友仮本店を移築すること、さらに鉄筋コンクリート造で図書館を建設する計画を報じている。見出しに、住友家から関西大学へ建物がすでに寄贈されたように大きく書かれ、また「住友合資会社から同大学に寄贈された大阪市北浜五丁目の元同社本部事務所の建物（約千坪）を千里山に移転増築すること、なり、来る十月頃には移築出来上るはずである。同建物は二三の大教室に充つるほか大学本部とし学長室、理事室、事務室、会議室、貴賓室等とする」[7]と報じられている。1926年4月の段階ではまだ寄付はなされていないにもかかわらず、報道内容はかなり詳細で、また実現したものに近い内容である。

一連の出来事を年表にしてみると、寄付の依頼から正式な寄付申込を経て、大学本館の工事が完成するまで一年足らずで、非常に短期間である。仮本店を譲り、大学本館に充てることは、手続きが正式に進められる前から内々には了承されており、移築のための計画は、手続き以前にある程度進められていたと推測できる。

表1　大学本館に関わる年表

年		月	日	出来事
1908	明治41	11		（住友）住友仮本店、北浜五丁目に竣工（野口孫市設計）
1922	大正11	6	5	（関西大学）大学昇格、千里山移転
		12	2	（住友）住友ビルディング一期工事（北半分）地鎮祭
1923	大正12	9		（関西大学）本館建設用の資材、焼失
1926	大正15	4		（住友）住友ビルディング一期工事（北半分）竣工
		4	7	大阪毎日新聞に「住友家寄贈の建物を千里山に移築」記事掲載
		4	15	（関西大学）山岡順太郎、住友合資会社を訪問し、寄付のお願い
		4	19	（住友）「関西大学ニ本社建物寄附ノ件」決済
		6	1	（住友）「関西大学ニ旧本館建物寄附申込書差出ノ件」決済
		6	5	（住友）寄附申込書
		6	14	（関西大学）「寄附御受書」
		7		（関西大学）大学本館着工
1927	昭和2	3	25	（関西大学）大学本館竣工、供用開始
		6	5	（関西大学）大学本館竣工式（昇格5周年と同時に挙行）
		9		（住友）住友ビルディング二期工事（南半分）着工
1930	昭和5	8		（住友）住友ビルディング二期工事（南半分）竣工
1954	昭和29			（関西大学）大学本館解体
1955	昭和30			（関西大学）第1学舎1号館竣工

大学本館の建築概要

1927年に竣工した大学本館の設計図書は、残念ながら見当たらない。だが『千里山学報』第48号の表紙には写真が掲載され、簡略な間取り図［1］と、竣成を知らせる記事が掲載されている。また、関西大学管財課所蔵の『第一学舎一、二期千里山守衛室確認通知書』に、「関西大学増築校舎設計図」と題した大学本館の平面図［2］がある。この綴りは、村野藤吾の設計により1955年に竣工した第1学舎の工事に関わる書類だが、敷地に既存建築として存在した大学本館の図面（青図）も含まれていた。この図面には制作年の記載がないが、第1学舎1号館の最初の工事として、木造の大学本館の北西部に鉄筋コンクリート造3階建の別館（建築面積約80坪）を増築する設計図と判断できる。[8] また京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵の村野藤吾の設計図面に、「千里山関西大学本館一階平面図」［3］が含まれている。［3］はトレーシングペーパーに鉛筆描きの図面で、第1学舎の設計に際し、資料調査や実測等を行い、当時の本館の姿を記録したものと推測できる。3点の資料を比較すると、室の用途の変更や、間仕切り壁の有無など細かな違いはあるが、竣工時から解体されるまで、あまり大きな変更はなかったようである。

［1］の間取り図を見ると、1階は教室が主で、北側には比較的広い学生控室が設けられている。2階は、西側には学長室、総理事室、研究室等の小規模な室が並び、南西隅の八角形の部分は貴賓室である。北東部には読書室や書庫が設けられ、南側には講堂が設けられている。1927年3月には移転工事が完了し、3月24日に主要新聞社を招き館内の公開を行い、[9] 翌25日には名士・校友に広くお披露目している。[10] 3月25日付の建物の竣成を報じる新聞記事は、いずれもこの講堂に言及し、「特色は五間に六間のステージの設備ある大講堂を含む点でおそらく全国大学中唯一無二のものであらう」[11]、「本館二階に七百名を容れる講堂がありこれに約三十坪のステージを設け、学生等が劇や音楽会を行ふやうにしたのが変つてゐる」[12] と伝えている。

『北浜五丁目十三番地まで　日建設計の系譜』の口絵に、住友総本店として使われていた1921（大正10）年の2階平面図が掲載されている。その図面と［1］を比較すると、西側の小規模な室が並ぶ部分は、もともと社長室や理事室等が並ぶエリアで、大学本館への転用後も室数や大きさは変えていないと判断できる。南西隅の八角形の部分は、住友時代は応接室、その東側には理事室が2室並んでいる。大学本館

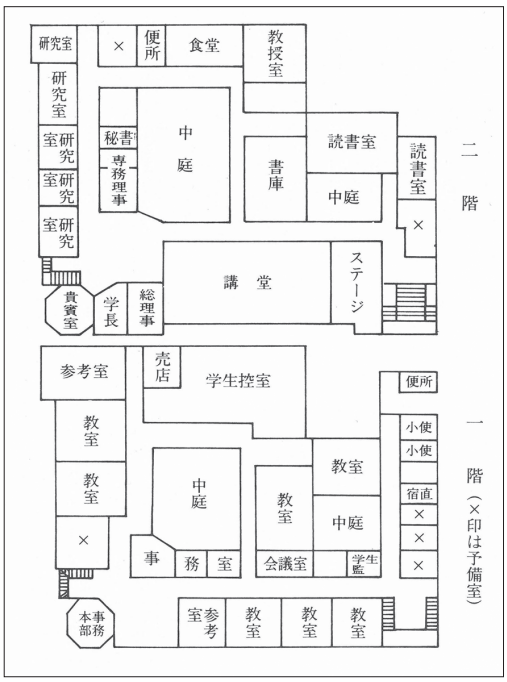

図3　大学本館　平面図［1］
（関西大学百年史通史編上巻より）

では八角形の部分は貴賓室、その東側は学長と総理事の部屋であり、室名は異なるが、スムーズな転用が図られたと思える。新聞記事の話題となった2階のステージ付き講堂は、住友時代には「経理課、総務課、監査課、林業所」と記された大きな一室になっており、間仕切りのない広い事務室空間だったと考えられる。住友仮本店の建物は、構造的には大きな変更を加えられることなく、そのまま千里山に移され、それぞれの室の規模や位置に合う用途に改修されたと考えられる。

［2］の図面は、1955年に完成する第1学舎1号館の最初期の工事の確認通知書に含まれていた。［2］は、新築建物が接続される既存建物の説明図である。大学本館北西部に、廊下を延伸して鉄筋コンクリート造で別館（教室）を増築している。作成年月日は記されておらず、村野藤吾の印はあるが、他の図面のような定型の図面名や縮尺、事務所名を記した枠がなく、綴りの中では違和感のある図面である。別館の増築に伴い、大学本館部分にも多少の変更を加えている可能性があり、図面作成時の状況を示しているとは断定できないが、寸法等が正確に記された平面図で、本館の正確な形状を知るには欠かせない資料である。なお、この図に示された別館部分については、同じ綴りに「関西大学校舎設計図」と題した平面図が別にある。形状や大きさは同じで、その図には村野・森建築事務所の定型の枠が設けられ、1951年5月24日の日付がある。

［3］も作成年月日の記述がなく、縮尺1/200で、鉛筆で描かれた大学本館の1階平図面である。形状や寸法は［2］と同じである。［3］は、村野藤吾が第1学舎の設計に際し、既存の大学本館について、資料や実地調査から状況を書き留めたものと推測できる。便所の位置や新築

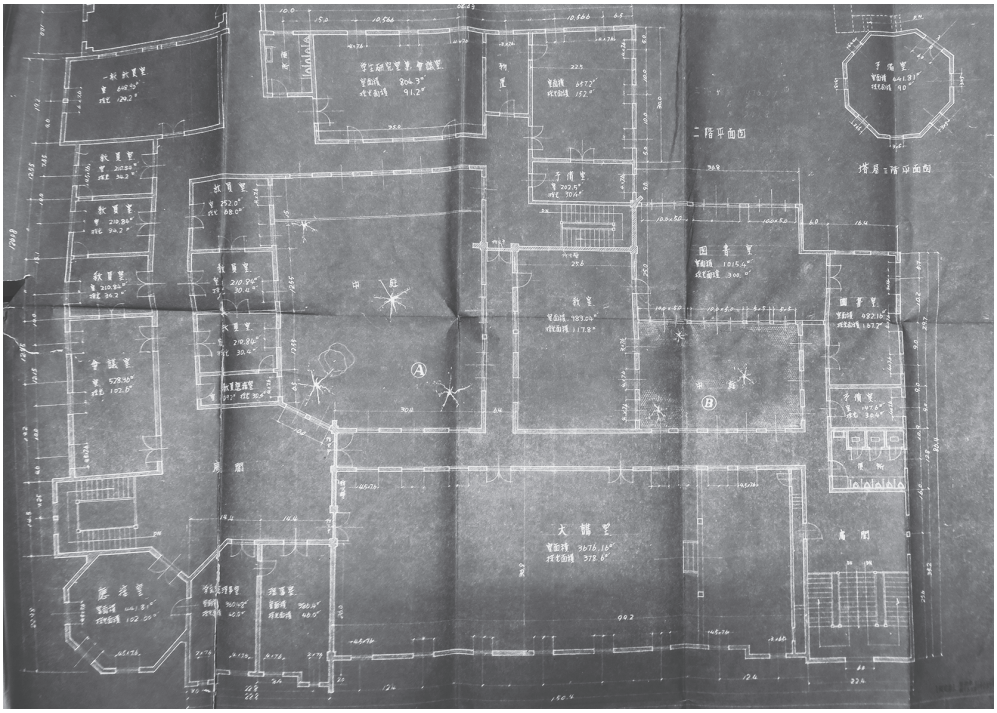

図4　大学本館2階（部分）（関西大学増築校舎設計図2階平面図［2］）

の別館と接続する部分などに違いがあるが、[3]は当時の実際の状況を、[2]は別館建設に伴い、改修する計画を示したと考えられる。

これら3点の資料を比較すると、部分的に間仕切壁の除去や部屋の用途や名称に多少の変更はあるものの、建物全体としては、竣工時から解体されるまで、ほとんど変わらずに使い続けられたと考えられる。

関西大学所蔵の資料には大学本館の断面図・立面図がなく、高さ方向の正確な寸法や外観の詳細な意匠はわからない。外観写真によって住友仮本店（図5）と大学本館（図1）を比較してみる。上述の通り、平面形は移築されても変わらず、したがって建物のシルエットもほとんど変わらないが、外観の細部意匠は若干異なる。

住友仮本店として建てられたのは明治末期で、西洋建築は何らかの「様式」を選択し、それに基づいて装飾するのが基本であった時代と言える。仮建築で木造とは言え、隅部の塔や出入口付近を中心に装飾がなされ、壁面は簡素だが石造建築風の仕上げに見える。[13] 規則正しく並ぶ縦長の上げ下げ窓上部には1階はアーチ型の、2階は矩形の装飾があり、屋根にはドーマー・ウィンドウが並ぶ。南西隅の塔部分はデザインの要であり、3階の窓は両脇に装飾柱がありドーム形の屋根とともに華やかな印象を与えている。南東端の出入口の脇にはもう一つ、3階建の小ぶりな四角い塔が付属されている。

大学本館としての竣工は1927（昭和2）年であり、デザインの分野では、「セセッション」や「アール・デコ」と呼ばれる直線や幾何学形態を用いるモダンなデザインが出現した時期である。また、移築といっても建物をそのまま移動させるわけではないので、木造の骨組は再利用するが、仕上げ材等は更新される部分も多い。大学本館の外

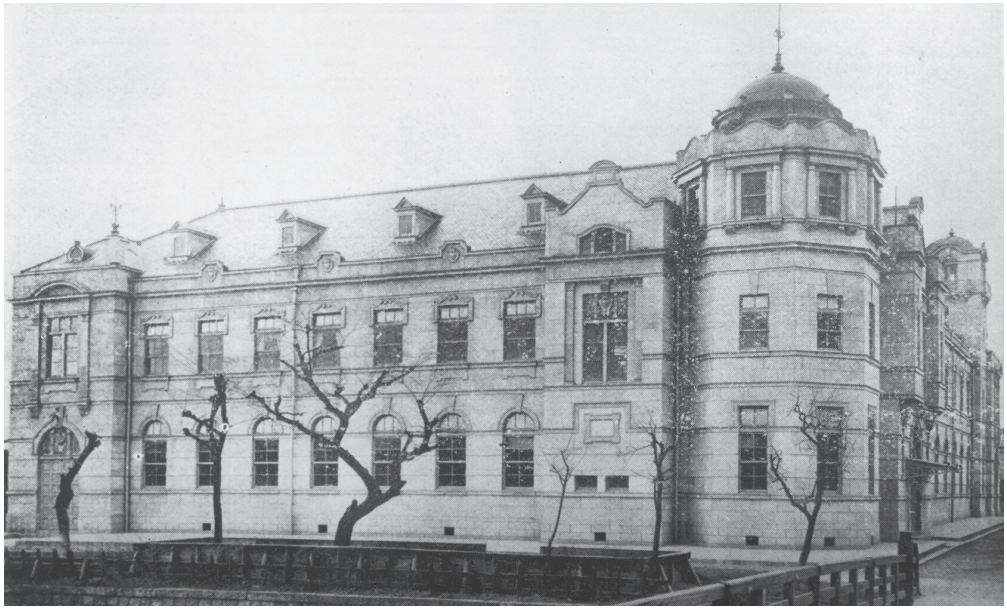

図5　住友合資会社本社（大阪市東区北浜5丁目）

観写真をみると、細部意匠はかなり変更されている。まず屋根にはドーマー・ウィンドウがなく、南東部の小さな塔もなくなっている。窓周りは、1階の窓にアーチが付いている点は変わらないが装飾は簡略化されている。八角形の塔部分も同様で、階ごとに異なる装飾の多様性はなくなり、垂直線で窓を挟んだシンプルな壁面構成になっている。外観意匠の変更には、短期間での工事が必要だったことや建設費の節約、あるいは時代のデザイン傾向への対応など、さまざまな要因があったと推測される。

大学本館は1927年3月末に竣成し、4月の新年度から本格的に使用されたと考えられるが、竣成式は、1927年6月5日に挙行された昇格5周年記念式典と合わせて執り行われた。住友合資会社常務理事・小倉正恒は、祝辞において「本日竣工の式を挙行せらるる本館は之元住友合資会社の館舎にして曩に住友合資会社より本学に寄贈せられ今茲に移築工事完成し其面目全く一新せるを見る。而も舊時の面影依然として尚存す。往時を懐ひ轉感慨に堪へざるものあり」[14]と述べている。

大学本館のその後

大学本館は、第1学舎1号館（1955年竣工）の建設に伴い解体されるまで約30年間、上述の通り、大きな改造もなく使われた。戦後、新制大学に移行し、学生数も増え、施設の充実を図る中で、大学本館（当時は「千里山法・文学舎」と表記）の建替えが決まった。1954（昭和29）年8月の理事会の記録によると、「木造石板葺二階建延坪壱阡拾七坪七七」の本館建物を個人に売却することを決議し、同時にその一部、ドームの部分36坪42を買い戻し、「適当の機会に之を再現し、記念館として保存するが如き処置を講ずること」[15]としている。

『関西大学百年史』でも、記念館建設計画があったが、実現しなかったことが述べられていた[16]が、近年、京都工芸繊維大学工芸史料館所蔵の村野藤吾建築図面のうち、関西大学千里山キャンパスに関連する資料中に、この幻の記念館の設計案が含まれていることが分かった。

「関西大学記念館移築工事」と題された図面は4枚で、平面図が3枚と立断面図が1枚である。グラウンド西側に建つクラブハウス西側の斜面に、大学本館の八角形の塔の部分を記念館として移築する計画になっている。平面図を見ると、クラブハウス1階には診療室や休養室、薬局などの記載があり、保健管理センターに改修されている。記念館へは、クラブハウスの地下1階と1階から入ることができる。クラブハウス北西隅の玄関から建物に入るとホールがあり、そこに記念館への連絡ブリッジが接続されている。

記念館は、大学本館の塔部分の3層に地階を1層加えた構成で、地下1階から3階まで、中央にかなり急勾配の螺旋階段を設置している。塔部分の1層あたりの面積は12・14坪（約40平方メートル）で、新たに設置される螺旋階段の面積が引かれると、使える床面積はあまりなく、実用性より、文字通り記念性を重視した建物になると考えられる。4枚の図面には作成年月日の記載がないが、縮尺1/100で、しっかりした線で描かれた図面である。理事会での決議もあったことから、村野藤吾の手により、記念館の建設に向けての検討が、ある段階までは進められたと推測できる。

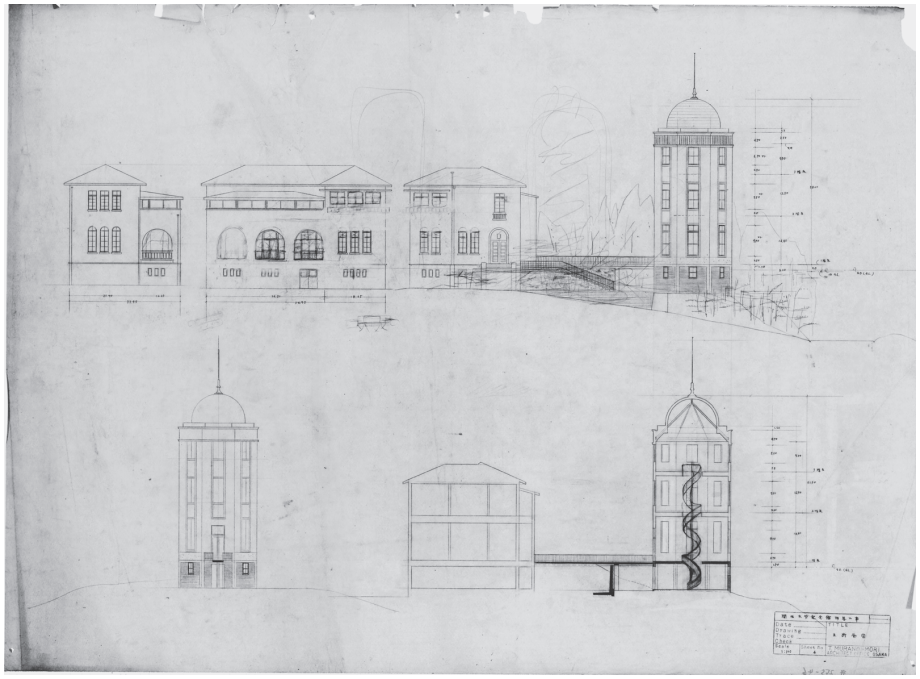

図６　「関西大学記念館移築工事　立断面図」
（京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵 AN.5159-80）

おわりに

大学本館は、千里山における２棟目の本格的な学舎であり、本部機能を有すると同時に、施設の充実を図る上で欠かせない建物だった。新築のために準備していた資材を失ったが、それ以前から関西大学を支援してくれていた住友合資会社の協力を得て、タイミングよく建替工事によって不要となる仮本店建物の寄贈を受けることになった。ここへ至る経緯において、誰が主導的に働いたのかは資料にははっきりとは示されていないが、個人的な交流を基礎としながらも、大阪における私立大学の雄として、関西大学の活躍を期しての住友家の後援を感じることができる。大学本館は約30年、学舎として十二分に使われたのち、さらなる施設の充実のため建て替えられた。塔部分を移築する記念館計画があり、ある程度、具体的に検討されていたことが分かった。計画が中断した理由ははっきりしないが、１９６０年頃は、千里山キャンパスの学舎整備が急がれた時期であり、記念館よりも実用性の高い施設が優先されたのかもしれない。２００３年に竣工した以文館の隅部は、大学本館をイメージさせる八角形の造形になっている。

注

（1）関西大学百年史編纂委員会：『関西大学百年史通史編上巻』関西大学、昭和61年、470頁

（2）同上、467頁

（3）小西隆夫：『北浜五丁目十三番地-日建設計の系譜』創元社、１９９１年、25頁

（4）同上、24頁

（5）住友家が関西大学拡張後援会に寄付をした事実は、関西大学年史編纂室が所蔵している『大正十年十月　後援会寄附金明細帳』という帳簿でも確認できる。寄付は「住友吉左衛門」個人名でなされたものと「住友合資会社　社長住友吉左衛門」名義でなされたものの2件が記録されている。個人名の寄付は、大正11年2月28日付で申し込まれており、金額は3000円で、翌3月30日に払い込まれている。もう一方、会社名義の寄付は、10000円が大正11年10月6日に申し込まれ、大正11年10月9日と大正12年8月24日の2回に分けて5000円ずつが払い込まれている。『寄附金明細帳』では名義と申し込みならびに払い込み年月日と金額しか分からないが、住友側の「備考」と対比することで、3000円は拡張後援会に、10000円は講堂の建築費であったことが理解される。

（6）前掲書（3）、24～25頁

（7）「住友家寄贈の建物を千里山に移築　面目全く一変する昇格後の関大」、大阪毎日新聞、1926（大正15）年4月7日

（8）第1学舎1号館は、中庭を囲んで教室が配された建物であった。[2]の図面が含まれている部分は、中庭の東側・北側・西側のコの字型の校舎建設の確認通知書で、1953（昭和28）年12月22日に確認されている。この部分は既存校舎に接続して建設される計画がなされており、[2]は、その既存校舎（大学本館および鉄筋コンクリート造の別館）の図面にあたる。

（9）「本学本館の竣成」、『千里山学報』第48号、昭和2年4月15日、7頁

（10）「舞台附きの学舎　我邦では唯一無二の新型　関西大学の新建築物」、昭和日日新聞、1927（昭和2）年3月25日

（11）同上

（12）「住友寄贈の関大本館竣成」、大阪朝日新聞、1927（昭和2）年3月25日

（13）寄附申込書では、壁面は「立瓦張」と表現されている。あまり見ない表現だが、瓦と記されていることから、石材ではなく、テラコッタのような焼き物の外装材だったと推察できる。

（14）「本館竣工式に於ける住友合資会社の祝辞」、『千里山学報』第51号、昭和2年7月15日、9～10頁

（15）関西大学百年史編纂委員会：『関西大学百年史資料編』関西大学、平成8年、839頁

（16）前掲書（1）、997頁

（はしてら　ともこ　関西大学環境都市工学部）